

特集

ちょっとをちゃんと 救急小処置 小手術

救急小処置・小手術。すなわち、主に救急外来の現場で、軽症患者に対して行われる、(基本的には)命にかかわることのない“ちょっとした”処置や手術。本誌「救急医学」ではメインテーマとして扱う機会があまりありませんでしたが、救急診療に携わる者ならば誰しもが求められる、大事な要素であることは間違いありません。

そして、上記では誤解を恐れず“ちょっとした”と表現しましたが、それはあくまで、いわゆる“救命のために行われる治療”と比べたときの印象の話。救急外来に訪れる患者一人ひとりにとっては、どのような処置・手術であっても、“ちょっとした”ものなどありません。だから、臨床医が救急小処置・小手術を適切に実施することは、患者の安全安心や生活の質(QOL)を守ることに直結し、それがひいては、より円滑な救急診療の運営にもつながるはずです。

そこで今号の「救急医学」では、この救急小処置・小手術をきちんと学ぶ／学び直すための特集を企画いたしました。主に救急外来で実施する機会が多いであろう処置を取り上げ、どのような場面で、どのような処置を、どのような手順で実施すべきか、実際に日々臨床でご活躍中の先生方に解説いただきました。医療分野に限らずどのようなスキルでも、まず頭で理解し、そして手を動かしてトレーニングと経験を積む。これが習得・レベルアップへの近道であるはずです。本特集がそのファーストステップとなることを期待しています。

普段から本誌をお読みいただいている先生方はもちろんのこと、より広く、さまざまな立場・環境で救急診療に携わる臨床医の先生方が「ちょっとをちゃんと」するために、役立つ1冊になれば幸いです。